

カスパー・ダーヴィト・フリードリヒによる対作品《階段を下りてゆく女性》および《光の方へ上ってゆく女性》(共に 1825 頃) を巡る一考察

杉山 あかね (フリーランス)

カスパー・ダーヴィト・フリードリヒ作《階段を下りてゆく女性》はフリードリヒ全作品の中でも唯一の夜の室内画であり、また、頻繁に描かれた後ろ向き人物像としてではなく、プロフィールとして人物を描いた稀有な作品である。また《光の方へ上ってゆく女性》でも、同様のプロフィールの人物像が薄暗い屋内の場面に登場し、モチーフと場面設定の観点から、従来より両作品は強い関連性を持つ対作品とみなされてきた。両作品は 1825 年頃に相前後して制作されたのち、直ちに画家の故郷グライフスヴァルトの兄へと贈られたと推測され、長らく同家の所有であった。その後 20 世紀後半には異なる所有者の手に渡っていたが、2005 年にグライフスヴァルトのポメルン州立美術館が《光の方へ上ってゆく女性》を購入、さらに《階段を下りてゆく女性》を所有者から委託されることとなり、現在では両作品は再び画家の故郷の地で並べて展示されている。

本発表では、この両作品の関係性を明らかにしたい。フリードリヒ研究において当作品は、ベルシュ＝ズーパンによるカタログレゾネ (1973) における解釈が定説となっている。それによれば、両作品における女性像はフリードリヒの妻カロリーネであり、彼女が階段を下りようとする姿は死を前に宗教を抛り所とする人間の状態を、逆に階段を上ってゆく姿は死後の復活、神によって救済された人間の状態を表現するという。つまりここで読み取られるのは「死と復活」という宗教的かつ普遍的なテーマである。これに対して発表者は、両作品は「敷居の前に止まった状態」と「敷居を超えて進み続ける状態」という、静と動のコントラストを伴った二様の状態を描き出した作品であると主張したい。出発点となるのは両作品のオリジナルを前にした際の三つの疑問、すなわちタイトル、画面構成、そして女性像に対する疑問である。まず両作品における画面構成の違いを明らかにする。さらに《階段を下りてゆく女性》における、建築構造上破綻を来したかに見える画面構成が、ある種の実験的創作の結果であった可能性に言及したい。そして描かれた女性像が同一人物ではなく、それぞれの人物が作り出す状況が二つの異なった営みであること、それがまたフリードリヒ自身と作品を贈られた兄アードルフとの関係に繋がっている可能性を検討する。

最終的にこの両作品は、従来みなされていた通り、緊密な関係性を持つ対作品であると言える。しかしここで、あたかも同じ場所で、二人の女性がまるで同一人物のように連続して見せる表現は、その印象と効果を十分に念頭に置きつつも、異なる場所で異なる人物が営む、異なる人生のあり方を示唆するものとなっている。身近なモチーフによって構成された単純とも言える画面には、互いをよく知る者にのみ理解し得る、画家の胸中が託されているのである。